

ゲスト 山口 勝業氏 インベストライフ 伊藤宏一氏、岡本和久



岡本 | 今日は(2010年12月28日)、かねてから日本学という分野を研究している伊藤宏一さんと、行動ファイナンスに「和風」という概念を導入して新しい分野を開拓されている山口勝業さんをお招きして、「和風」ということについて大いに語り合ってみたいと思います。ちょうど私も、2011年1月に『賢い芸人が焼き肉屋を始める理由*投資嫌いのための和風資産運用入門』という本を出版いたします(1月20日発売済み)。お二人のご意見を聞くのが非常に楽しみです。ただ、お二人とも論客なので、時間内に座談会が終わるかどうか……、それが心配です(笑)(結局、やはり2カ月の連載ということになりました)。

伊藤 | 江戸時代にはかなり優れた考え方ができていたにもかかわらず、明治維新で「とにかく新しいもののほうが優れている」という近代主義が浸透して、昔からある“良いもの”が見えなくなってしまった。ところが21世紀になって、特にリーマンショック後、これまでの資本主義に対する反省が出てきた。そこで、もう一度近代の前に戻ってみようという機運が出てきたように思います。また、アジア中心のグローバル化が進んでいるので、日本人としてもアジアという視点が重要になっている。もう一度、われわれの原点を見直すときにあるといえるのではないのでしょうか。



山口 | まあ、みんな欧米を見てやってきましたからね。

伊藤 | そう、そう。葛飾北斎が81歳のときに中国全土の絵を描いています。これを見ると中国奥地まで詳しく描いているんです。雲南省からベトナムまでです。意識がアジアのほうに向いていたと思うんですね。今の日本人はニューヨークやワシントンのことはわかるけど、中国の奥地がどうなっているかはわからない人が多いのではないのでしょうか。

山口 | だいたい、太平洋側が表日本で日本海側は裏日本といわれていますから。

伊藤 | そうなんです。裏日本という言葉ができたのは明治30年代です。実は、江戸時代には「内日本」と言われていて、流通の大動脈は日本海側だったのです。船による輸送が中心だったからで、大陸と日本の日本海側に囲まれた内海が便利だった。しかし、東京が日本の中心になり鉄道が敷かれるようになると、一気に中心が太平洋側が変わった。そういう基本的な構図ができてから、裏日本と表日本という言われ方をするようになったのです。これも変えないといけないですね。

岡本 | 江戸時代という海外からは全然隔離されていたような印象が強いですが、そんなことはなかった。実は先日、長崎に行ったときに出島をゆっくり見物したんですが、正直、驚きました。

中国からは非常に頻繁に船が来ていたし、オランダからも定期的に船が来ていた。船が来ると、「今度はこれを買って来てね」というショッピング・リストを渡して次の船に乗せてきてもらう。望遠鏡とか、地球儀とか、薬とか、花の種とかですね。そして、その出島に各藩から人間が来ている。まあ、留学生のようなものでしょうか。情報の伝達速度は遅かったかもしれないけど、かなり海外の事情はわかっていたという印象でした。情報の希少性が高かっただけに、非常に熱心に海外からの情報を勉強していたのかもしれない。



山口 | あれは、管理貿易だったんですよね。言葉自体は後からできたとか。

伊藤 | 「鎖国」という言葉は、江戸時代後期の19世紀初頭(1801年)に、もと長崎オランダ通詞だった志筑忠雄がドイツの文献を翻訳した際に、その表題に用いたのが最初なんです。

「和風」とは何か？ 9つのポイント

岡本 | もう、かなり話が盛り上がっていますが(笑)。今日は最初に伊藤さんから「和風」の概論についてお話いただき、その後、山口さんから、「和風」が投資行動に及ぼす影響などについて解説していただきたいと思います。それから私が「和風」資産運用の考え方を少しお話して、その後自由討議ということにしたいと思います。まず、伊藤さん、お願いします。

伊藤 | 私はこの2~3年、日本のことを特に勉強しています。「今、なぜ、和風なのか」ということですが、経済的にいえばリーマンショック後、世界の状況が大きく変化して、アジアを中心とするグローバル化が明確になってきた。同時に環境問題の解決が不可欠で、グリーン・キャピタリズムを進めていかなければ破局が来るということがはっきりしてきた。この二つを考えると、欧米を向いた近代化を見直す必要が出てきた。特に、地域の自然や、文化や、国民性に根ざした経済発展が重要になってきた。そのように頭を切り替える必要があるのではないかなと思っているわけです。

それで、「何が和風か」という点について9つくらいポイントがあると思っています。まず、和風の第1のポイントは「たおやめぶり」と言いたいですね。「ますらおぶり」ではなく、たおやめぶり。日本は自然環境が非常に豊かで、四季の細かい変化があり、きれいな水、森、水田があり、自然に対して人は対立するのではなく、協調をしてきた。「受け入れる」という感じです。私の考えでは日本はもともと西国と東国に分かれていて、西国は照葉樹林文化、東国はナラ林文化です。採取生活が中心だった東北から北海道にかけても木の実が豊かで、乾燥しきっていない。海にも魚が豊かです。実は採取生活といっても、絶対に狩猟をしないといけないという状態ではなかったのです。ですから、東国といえども自然の恵みで生きていたのです。

たおやめぶりという話は司馬遼太郎とドナルド・キーンが対談した本に出ているものです。ここで司馬遼太郎の『坂の上の雲』で描かれている日露戦争は、ますらおぶりの世界ですが、日本人の特性としてのベースはたおやめぶりであるとしています。彼は、中国から漢字が輸入されたときから日本にますらおぶりが入ってきたとしているんですね。重要なポイントは、たおやめぶりは、決して弱いということではないということです。やさしく受け止め、忍耐強く取り込んでいく。たとえばA=中国、B=日本とするなら、いったんはAを受け入れ日本はいったんA化する。そして、その後AだったものをB化する。漢字を取り入れてひらがなを生み出したように、中国麵を取り入れラーメンにしたり、スパゲッティを取り入れ明太子スパゲッティを作ったりする。おまんじゅうのようなパンを作りたいというのであんパンを發明する、といったようなことです。



- 山口 | テリヤキ・バーガーもそうですね(笑)。
- 伊藤 | そうですね。いろいろなレベルでそのようなことが起こるのです。ものすごく受容力がある。一方、ますらおぶりの世界では、Bを負かしてA化する。Aが負ければ全部、Bになる。Bが負ければ全部、Aになる。強くて勝てばいいけど、負けるとポキンと折れてしまう。たおやめぶりはジワーツと取り込んで馴染ませていく。だから、一挙に崩れることはない。
- 岡本 | なるほど。「柔よく剛を制す」ですね。相撲でも、横綱相撲はまず、相手に好きなように攻めさせて、それから自分の型に持っていく。双葉山の「後(ご)の先(せん)」というのも同じです。また、そういうものが好きなのは、たおやめぶりのDNAがわれわれのなかにあるからでしょう。2番目は何ですか？

「自然主義」と「多元主義」

- 伊藤 | 次は自然主義です。古神道では八百万(やおよろず)の神々といわれるように、自然に神が宿っていると考える。そこへ仏教が入ってきた。仏教を日本化したときに、生きとし生けるものにはすべて仏性がある、草木国土悉皆成仏(そうもくこくどしっかいじょうぶつ)とか、山川草木悉皆成仏(さんせんそうもくしっかいじょうぶつ)という考え方にしたわけですよ。天台本覚論ではそのようになっている。インドでは生きとし生けるものというのは、動物までだったのですが、日本に来ると動植物は当然、山にも岩にもすべて命が宿っているというところまでいくわけです。天台本覚論では古神道と同じ自然主義になっています。
- 山口 | なるほど。
- 伊藤 | 3番目が多元主義です。仏教を取り入れて日本化したように、いろいろな違った価値観や文化を取り入れて、それを重ね合わせて日本化していくというのが、本来の日本の方法論なのです。キリスト教とゲルマンの異教が戦うというような話は日本にはなかった。江戸時代には、文化的には日本は四つの国があったと思っています。琉球、西国、東国とアイヌです。それが重ね合わされている。たとえば、昆布という言葉がありますが、この「コンブ」という発音はアイヌのもので(『インベストライフ』1月号参照)。それが中国に伝わり「昆布」という漢字になり、それが日本に昆布として戻ってきたのです。アイヌは文字を持たなかったですからね。その昆布が西国に伝わり、出し汁に使われている。つまり、グルグル、グルグル回っているんです。
- アイヌは中国との交易を盛んにしていましたし、琉球と東南アジアとの間では、はるか昔から幅広い交流関係があった。今になって急に新興国などといわなくても、ずっと前から関係が深かったのです。いろいろな多様なものをうまく取り入れていたのが多元主義です。これと逆の方向で一元化してしまったのが明治維新で、強烈に欧米化を志した。確かに植民地にはならなくてよかったのですが、国内も一元主義になってしまった。でも、本来は多元主義なのです。十二単もそうですね。いろいろな色ものを重ね合わせる。日本人の普通の食事でも、和食あり、洋食あり、中華ありと、バラエティに富んでいる。中華ばかりずっと食べる人はいないですからね。
- 岡本 | 私は毎日ラーメンでもいいですけどね……(笑)。
- 伊藤 | 4番目が方法論的現実主義とでもいいましょうか、現実的に自然環境に恵まれ、感性は豊かなのだけれど、現実を越えた、超越的、理念的思考には弱い。ヨーロッパのキリスト教会は縦に長く、神様はやはり超越して上から降りてくる。つまり現実から超越した理念・世界と重なり合っている。日本の神様は山から降りてきたりし、家のなかにも神様がいる。他界・実界は超越せず生活世界と連なり合っている。
- 山口 | ああ、かまどの神様もいる。
- 岡本 | トイレの神様も(笑)。

伊藤 | そういう意味で日本人の場合、理念で人を動機づけるのが難しい。理念ある人はいないわけではないけど、少数派でしょう。そして、5番目は変化対応能力があるということです。日本には四季の変化がある。それに台風などの突発的な変化がある。和辻哲郎が日本人の感情は「しめやかな激情」だといっていますが、普段は細やかなのだけれど激情が走ることがあるのは地震や台風があるからでしょう。変化に対応するのにも細かい変化を見るのです。たとえば、旧暦では1年を24の季節に分けている。二十四節気ですね。2週間ごとに変化に対応していく。5月5日か、6日ごろに「立夏」というのがあります。何となく夏の気配がするというわけですね。気配を感じるというのはやはり先見性があるということです。

同時に悪い変化を読み取る力もあります。たとえば、二宮尊徳が、天保の大飢饉が起こる年の6月にナスを食べたら秋ナスの味がしたということです。彼はだいたい50年に1回ずつ飢饉が起こるということを実証的に知っていた。ちょうどその時期でもあったので、彼は農民にアワやヒエを作るように指導し、食料の備蓄をさせた。見事にそれが当たったのです。

それから変化への対応ということでは、近江商人の間に「成行きに従う」という考え方があります。外村興左衛門という人がいて心得書を家族に残している。そこでも「自然に従いなさい」「自他ともに相成るべく候ことを深く考えて行え」ということを言っています。そして、目先の利益に迷わされず、「遠き行く末を平均に見越し、永世の儀を貫け」と書いています。淀屋が三代目でお家取り潰しになった教訓もあり、何代も家が栄えるための最良の商家の教えだったのです。

山口 | 経営の持続性を重視していますね。家訓を残して、がっばり儲けなくてもいいので長く続けるということが重視された。

岡本 | 永代という、代々、続くということが大切だった。個体としての人間は生まれて死んでいくけれど、家という生き物をいかに長生きさせるかが個体としての人間の役割だったのでしょうか。

伊藤 | こんなことも言っています。「相手少なきときに買い入れ候らえば、売り人も喜び申すべく」、相手のことを考えて誰も買い手がいないときに買ってあげると喜ばれる、相手の喜ぶことを考えて行動しなさいということです。みんな買わないから自分も買わないというのではなく、相手の喜ぶことをしてあげるとそれが結局うまくいく。

岡本 | これは投資でも同じですね。竹田和平さんが、みんなが株式を買いたがっているときには「私は株を持っているから売ってあげましょう」、みんなが売りたいがっているときは「私は現金があるので買ってあげましょう」、という方針で売買をしていると自然にうまくいくというようなことをおっしゃっていました。

日本人の美意識、道徳意識

伊藤 | このような考えがなくなっていくのは戦後でしょうね。企業に入れば、それで身分が固定して生活が安泰になった。やはり今、変化に対する対応力を呼び起こさなければいけない。6番目は美意識的道徳意識です。正しいか、正しくないかよりも、きれいか、汚いかが道徳の基準になる。社会的な正義とか、社会的責任とは別に、あの人はおカネに汚いとか、きれいだとすることが古来日本人の美意識、道徳意識なのです。

山口 | 「粋」という言葉がありますが、自分で自分のことを粋とは言わない。周りが「粋だね」と言ってくれて初めて意味がある。日本的な美意識の表現ですよ。

伊藤 | かつこいいいというのをもう少し美的にしたのが粋です。反対に野暮なこととはしてはいけない。カネに目がくらむようなことは野暮である。そういう意識が持てると、少し世の中変わってくるかもしれない。

山口 | 外面的なかつこよきではない。

岡本 | もっと内面的なものでしょう。

伊藤 | 美意識についていうと、金より銀かなということがあります。金閣と銀閣がありますがベースは、キンキラキンよりは少し渋いほうがいい。しかし、全部渋いとイヤなのですね。つまり、「あわれ」「はなかし」もいいけど、「あっぱれ」もいい。銀がちょうどそのバランスがいい。

さて、7番目ですが、小さいものへのまなざしです。『華嚴経(けごんきょう)』という経典がありますが、それによれば世界は毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)が顕現(けんげん)したものだとしています。毘盧遮那仏というのは東大寺の大仏ですが、微塵(みじん)のなかに世界があるということを言っています。一つひとつのチリのなかに世界がある。一本の道端の草にも世界があるというのが日本風の考えです。



岡本 | 私は90年代に4年連続で出羽三山で修験道(しゅげんどう)の修行をしたことがあります。1回が4日間程度ですが、ずっと一汁一菜で、滝行をしたり、沢駆けをしたりしながら湯殿山、月山、羽黒山と、観光コースとは逆に回ります。やはり、それをしていると意識がものすごく繊細になっていて、山を歩いているときにふと拾った葉っぱの裏に小さな虫がいたのですが、それを見たときに言いようもないほど感動したことがあります。言葉では説明しにくいのですが、「あ、ここに世界がある」という感じでしょうか。たぶん、昔の人は現代人よりも感性が鋭敏で、小さなものへのまなざしというの今よりはずっと鋭かったのでしょう。

伊藤 | 「六根清浄」で身を清めていくと微細な世界への感性が目覚めてくるわけですね。たとえば桜は、もともとは「裂ける」という言葉に「ら」という接尾詞がついたものだといわれています。裂くというのは何かというと、桜の花びらの先が二つに分かれていますよね。日本人はそれを見ているんです。やはり、このような細かいところにまなざしがいくというのは日本人の特徴でしょう。



山口 | なるほど、それで日本人は微細な細工が得意なんですね。携帯でも何でもいろいろな機能を付ける(笑)。

伊藤 | 8番目が支えあい、助け合いです。先ほどの華嚴経のなかに融通無碍(ゆうずうむげ)という言葉が出てきます。融通の融は金融の融ですね。無碍というのは差し障りがないという意味です。つまり、人と人が障害なくつながりあっているオーガニックな状態です。お互いにつながりあって、支えあい、助け合っている。その考え方が江戸時代になると「講」になる。頼母子講(たのもしこう)とか、無尽講とか、これらが保険や金融の機能を果たしていた。

昔、森有正というフランス哲学者がいたのですが、日本語は二人称的性格があるということを指摘しています。何かを言った場合、必ず自分と相手が同時に意識されている。「私」と言った場合には特定の相手にとっての私になっている。たとえば、子どもに話しかけるときに、「お父さんはね……」と言う。これは話している子どもの立場から見ると「お父さんはね」といっているわけです。支えあうという意味でいえば、講が進化し、最後は五常講になる。マイクロファイナンス的なものに共感する性格があるということです。

- 山口 | 今の話に関連しますが、浜口恵俊が「間人主義」と言っていますが、日本人にとっての自我というのはインターパーソナルなものです。それを拡大すると「世間」という概念があります。日本人にとっての世間というのは、自分が直接関係性を持っているものです。だからソサエティではない。コミュニティでもない。もう少し狭い範囲なんだけれど、地理的な意味ではなく、血縁関係でもない。たとえば、伊藤さんと私は別に血縁関係があるわけではない(笑)。
- でも、FPとか、資産運用の業界でつながりはある。だから、伊藤さんは私の「世間」のなかに入っている。私が悪いことをすると、「世間体が悪い」ということになる。伊藤さんが「山口はひどいヤツだ」というと、それが世間にあつという間に広がる(笑)。どうも、欧米にはソサエティやコミュニティはあっても世間に当たるものがないんですよ。
- 岡本 | 世間というのは、外的な資格とか立場というよりは、内的に意識を共有しているというか、特定の人びとの間で共有されている集合的な意識に支えられているような気がしますね。
- 伊藤 | 明治30年ごろに治水法ができるんです。江戸時代までは信玄堤などの低水工事をしてきた。洪水になれば堤は水のなかに隠れてしまうが、水が引くとまた戻ってくる。ところが、近代的な治水は高水工事で川を力づくでせき止めてしまう。ますらおぶりのになった。それで山の木を切っていくので枯れていくんです。それが明治30年ごろになると日本各地に「山の神講」というのができ、みんなで山を守ろうとおカネを出し合い、森林の保全をするわけです。
- 山口さんのいう「世間」というのは、近代のやや悪い面に対抗するものとして地域でできていた。このような性格は、現代では、私が今かかっているダムを作らず川の高低差で発電する小水力の市民出資とか、NPOなどの力になる可能性があるように思います。
- 岡本 | 昔、子どもがアメリカの幼稚園で「いつもエンジェル(天使)があなたを見ていますよ」という内容の歌を覚えてきて、「へえー」と思ったのを覚えています。日本だと「お天道様が見ている」ということになるのでしょうか。感覚的にはエンジェルとお天道様は全然違いますよね。エンジェルは上から見ている。お天道様って、むしろ世間様かもしれない。先ほどの山川草木ではないですが、仏様はどんな小さな米粒にも宿っている。そのへんは欧米人の意識とはずいぶん違いますよね。
- 伊藤 | 最後の9番目ですが、「精神としての身体」という言い方もありますが、精神と身体は一体で、身体的に会得することを重視します。茶道でも、華道でも、たぶん、資産運用でもそうだろうと思います。
- 山口 | 日本では「道」になる。柔道、剣道、茶道、華道。商人道もある。単に知識で覚えたものではなく、また、体で覚えたものでもなく、その根底にあるナントカ精神のようなものが裏にある。これらが一体にならないと完成度が高まらない。
- 岡本 | 私にも『長期投資道』という著書があります(笑)。そのへんが何か日本的なプロフェッショナリズムに通ずるところがあるのかもしれないですね。
- 伊藤 | 以上が私の和風の9つの要素です。良い面もあれば弱点もありますが、近代化のなかで忘れられた、失われたものも多いのです。継承すべき素晴らしい知的資産があるのにそれがきちんと評価されず伝えられていない。教えられていない。資産運用についても、欧米のものを持ち込んではいけるけれど、それが和風化されていない。そんな感じを持ちますね。

行動ファイナンスから見る「和風」

- 岡本 | ありがとうございます。それでは山口さん、行動ファイナンスの観点から「和風」のお話をお願いします。
- 山口 | 伊藤さんがいみじくもおっしゃったように、日本はリセットボタンを2回押してしまったんですね。明治維新のときと戦後です。全部、昔のことをワイプアウトしてしまった。明治維新以来、ずっとますらおぶりを目指してきた。「欧米以外のものは全部忘れろ！ 富国強兵だ！」というのでやってきて、その結果、戦争に負けてしまった。負けてしまったら、昨日まで鬼畜米英などと言っていたのが、今度はアメリカ礼賛になってしまった(笑)。ただ、リーマンショック以来、「アメリカ型資本主義って本当にこれでいいの？」という反省が出てきている。まあ、世界的な現象でもありますけどね。そのようななかを生きてきて、最近、アメリカのファンドマネジャーなどと話すと、「こいつら歴史を知らないな」という感じを強く受けるんですね。まあ、たかだか建国以来200数十年ですから無理ないともいえますが、イギリス人と話しているともう少し含蓄があることをいう。やはり、歴史というものを背負っているかどうかの違いのような気がしますね。
- 岡本 | 明治維新になり、日本の政治体制をどうするかというとき欧米模範となりましたが、また、突然、大宝律令が出てくる。確かにアメリカ人は民族としての過去の積み重ねはあまりないが、そのぶん、未来志向になるのかもしれない。あまり過去にとらわれないというか、とらわれる過去がないですから、自由に未来志向になれる。良い面もあるけど、山口さんのような含蓄はあまり感じないですね。

山口 | 行動ファイナンスというも、新古典派経済学を否定するものとして誕生した。でも、観察の対象となっているのは目のわれわれの社会じゃないですか。伝統的な新古典派経済学で合理的といわれてきた行動を、みんながしていないのはおかしいというところから発生したわけです。人間はやはり、完全に合理的な行動をするものではない。それでは、どのように合理的でないのかというところから行動ファイナンスができてきた。



さらにいえば、西欧人にとっての合理的行動って、本当に日本人にも合理的だったのかという疑問がある。彼らが合理的だといってもわれわれには合理的ではないかもしれない。日本人から見て「あいつの行動は野暮だ」という感覚は別に、新古典派経済学のモデルになっているわけではない(笑)。日本人のわれわれが持っている行動の基準があって、それに合っているから「粋だね」、外れているから「野暮だね」という話になる。では、われわれが合理的だと思う行動が新古典派ではないとすると、どこに起源があるのだろうか。そう思って遡って調べるうちにぶちあたったのが江戸時代だったのです。

岡本 | なるほど。山口さんのオフィスは神田神保町で古本屋街に近いから、古い本はいくらでも探せそうですね。

山口 | そうです。いろいろ調べ始めて、ちょっと古い本で山本七平さんの『日本資本主義の精神』という本を読み直してみたのですが、それがヒントになりました。それから石田梅岩の石門心学の本など読み始め、「あ、なるほどね」と納得がいったわけです。日本人は仏教あり、神道あり、儒教ありで何でもブレンドする。また、欧米では神様は遠くの上の方から降りてくる、あるいは来世にいる。「今は苦しいけれど来世になったら良いことがあるよ」という考え方が中心です。そこへいくと日本人は「今年儲かるよ」という現世指向が強い。お正月に神社に行って熊手を買ってきて、「今年ががっぽり儲かりますように」とお願いする(笑)。その現世指向を合理化するために仏教や神道や儒教を借りてくる。

それから、永代という言葉のように、長く続くことを重視するし、毎年みんなで力を合わせて努力するという農耕民族的行動パターンがある。田んぼを耕して、来年もまたその田んぼを使う。狩猟民族は、狩に行くと獲物が取れたら翌日は休む(笑)。狩猟民族的、搾取強奪的、自分の領地を拡大する、奪い取る拡大と、持っている領地を豊かにしていくという方法とがあり、農耕民族性の強い日本人は後者です。時々、ますらおぶりの真似をして大陸を攻めたりすると失敗する。基本的にカルチャーが違うんですよ。

伊藤 | ええ、そうですね。

山口 | しかし、遡って経済学の基を築いたアダム・スミスは『国富論』が有名ですが、実は『道徳感情論』という本も書いているんです。

伊藤 | そうですね。スミスの人間論がシンパシーとフェアプレイの『道徳感情論』で、そのうえに社会論としての『諸国民の富』と法律論としての『法学講義』がある。

山口 | 『道徳感情論』では、「相手のことを思いやる」などということが書かれているのですが、どこかの時点でそれが経済学から切り離されてしまった。そして、「自由放任にしておけばうまくいく」というような理解のされ方になってしまった。でも、この2冊はセットで考えなければならない。それで江戸時代の書物を読むと、アダム・スミスと同じようなこと書いてあるんです。しかも、スミスより100年ぐらい早くね。だから、歴史のあまりない人たちの言うことを真に受けてやってきた経済学って、いったいなんだったんだろうと思うんです。マルクス経済学にしても、ベースは当時のイギリスの社会を前提に作られている。それをそのまま日本に持ってきて使おうとしても「間尺に合わない」と思うんです。もう一度、日本固有の、江戸時代に育ってきた経済や道徳の思想などを勉強し直してみたらいいのではないかなと思います。今、研究をしているところです。

岡本 | おっしゃることはよくわかります。後でお話しますが、私も、欧米の投資理論に対して同じような思いを持っています。

変遷する土農工商制度

- 山口 | たえば土農工商にしても、四つの身分制度のなかでそれぞれの人々がどのような思いで生きていたかに、今、興味を持っています。戦国時代が終わったら武士は出る幕がなくなりました。やる事がなくなると旗本退屈男になってしまった。そうするとモラルが低下した。でも、一応、支配階級だから格好をつけなければいけない。しかし、自分たちを養うだけの経済力がないので、徐々に崩壊していかざるをえない。崩壊を防ぐためにも、「俺たちは偉いんだ」という立場をまわりに押しつけたために、おかしなことがたくさん出てきた。最後には幕末になって、ついに崩壊してしました。
- 岡本 | 確かに土農工商は江戸時代の初期には身分制度だったのですが、後半になると職分を表すものに変質していますよね。武士だけはそれに気づかなかったかもしれないが、町人はそれぞれの分野の職業人となっていた。
- 山口 | そうです。身分制度から職分制度に変質している。そして、各職分の間での西歐的な階級闘争というのがない。その代わり、階級内階層闘争のようなものがある。農民でも農民層分解のようなことが起こった。明治維新でも、本当に維新を推進したのはどちらかというと下層武士クラスの人を中心だったのです。
- 伊藤 | 網野善彦さんも指摘していますが、土農工商という四つの区分のなかに、さらに細かい分類があった。たとえば「農」とくられたなかにも、山で暮らす人も、漁民もいるし、結構たくさんの方がいた。また、村のなかにも商品生産をしているところもあったり、米の量だけで石高を測っていたけれども米以外の商品生産もたくさんあった。江戸時代に各地の特産物ができていたわけです。その商品生産と交易の力の強いところが典型的には下関と鹿児島ですから、薩長が活躍した経済力の源はそこにあった。でも、仙台藩などは米生産だけだったので、財政危機に陥っていったわけです。だから四つに分かれているといっても、それはかなり既成概念的で、箱根の関所は越えられないといっても海でいくだけでも回れる。お伊勢参りだって最大のときは500万人ぐらいの人が行ったそうです。江戸時代の人口は最大3000万人ですから、6人に1人が伊勢に行っていたことになります。相当の流動性がすでに江戸時代にはあったということです。
- 山口 | 土地に人間を縛り付けるといっても、人間は余っているのです、梅岩のように農村から出て町で丁稚奉公をする。でも、本籍は村にあるんですね。10年ぐらい奉公をして村に帰ってくる。
- 岡本 | 戻ってくることで情報が農村にも伝わるわけですね。留学制度というのか……(笑)。
- 伊藤 | 江戸時代は経済の中心が江戸と大阪のツートップでした。最初は大阪が経済の中心で、江戸は消費地だったのが、だんだん江戸も経済力をつけてきた。各地に特産物があり、外は船でぐるぐる回り交易もしていた。非常にゆるやかではあっても経済は回っていた。もうひとつ、東では金、西では銀が流通していた。銀貨と金貨の交換を国内で両替していた。その両替商が銀行になっていったわけです。領収書に「金〇〇両」と書くのは、「銀を金に換えたらいくらですよ」ということを示しているわけです。
- 山口 | 国内でカレンシー取引があった(笑)。
- 伊藤 | レートが決まると旗振り山を経由して手旗信号で市場価格情報がすごいスピードで伝わっていった。そういう意味ではマーケット・メカニズムが結構しっかりできていた。
- 岡本 | 日本で株式取引所ができたのは1878年です。江戸時代の米相場の伝統があったので、マーケットという概念はうまく浸透したのではないのでしょうか。最初は公債の取引がほとんどです。龍馬らが大政奉還に成功して幕府を倒したのはいいけれど、それでは今まで幕府で禄(ろく)を食んでいた武士はどうなったかという、結局、彼らは秩禄(ちつろく)債というような公債を受け取るんですね。それでも生活が苦しくなるとそれを売る人が出てくる。キャッシュフローを生む公債を、市場を通じて売却するという発想がすぐに理解された。まあ、それが日清戦争に勝ったところから取引の中心が株式になっていった。
- 山口 | ああ、なるほどね。
- 岡本 | お二人の話を受けてということになりますが、やはり、日本人のすごいところは、海外から来たものを和風にして、すっかり自分たちになじむ形にして取り込むことをずっとしてきているということですね。漢字もあんパンもすごいんですが、私が一番感心しているのは歌謡曲です。歌謡曲は一般的に、西洋音楽を基盤に作曲されています。譜面も五線紙に書かれます。要するにベースが西洋音楽で、西洋音楽の理論ののっかって五線紙に楽譜が書かれる。それに従いながら、メロディーや和音、そして節回しというか、ゴブシやウナリなどを交えて、どう聞いても日本の音楽に仕立てている(笑)。

山口 | なるほど。

なぜ日本人は投資嫌いなのか？

岡本 | ここに何か資産運用を考えるうえでも参考になる点があるのではないかと思います。山口さんの言う新古典派的な経済理論、とりわけ投資理論は、すべての人間は合理的であるという、あまり合理的でない前提に立っています(笑)。しかし、長期的に見るとやはり重力の法則のようなもので、物事は合理的な方向に向かって進んでいく。問題は、人間の行動がそのような方向から乖(かい)離するということです。そして、まさに山口さんが提起されるように、非合理的な行動の背景には国民性という要素があることも事実です。日本人が投資嫌いだという背景はいろいろあると思いますが、大きな理由になっているのが、日本で一般に浸透している投資手法が西欧から輸入したそのままの姿になっているということにあるのではないかと考えています。あまりにバタ臭い。リスクだ、リターンだ、アルファだ、ベータだとみんなカタカナじゃないですか。それをもう少し和風の味付けにしたら、投資を始める際のバリアというか、ハードルを下げることはできないかと思ったわけです。

伊藤 | 一般の人たちが投資に踏み切るのは、なかなか決意が要りますからね。

岡本 | まあ、20年前までは日本の社会は安泰で、お国と会社に任せておけば、自分の将来のことはあまり心配しないでよかった。しかし、もはや、そうではないことは明白です。そうすると、どうしても、将来の自分は今の自分が支えざるを得ない。しかし、どうしてよいかわからない。株や投信は怖い話ばかり聞く。とにかく、貯めなければということで銀行にせっせとおカネを預けている。でも、貯めるというのは、使わないでとっておくということです。投資はおカネを活用して増やすということです。国の支援が手厚かったときは、ただ、とっておけばよかったのかもしれないですが、これからは増やしていかなければならない。

そこでこのたび、講談社+α新書から新しい本を出させていただくことになりました(1月20日に発刊済み)。メインの書名が『賢い芸人が焼肉屋を始める理由』、副題が「投資嫌いのための和風資産運用入門」という本です。ちょっと、説明しますと、まず、芸人さんは人気があるうちはすごく儲かるけれど、落ち目になると収入がガクンと減ってしまいます。ですから、賢い芸人さんは、人気があるうちに焼肉屋などを開店して、将来の収入の支えになる準備をします。

山口さんの親分で、『インストラライフ』2010年12月号にも出いただいた、ロジャー・イボットソンさんの人的資産の考え方であれば、芸人さんの収入のキャッシュフローはジャンクボンドのようなものです。だから、収入の多いうちに将来のキャッシュフローが安定するような資産を保有しておくというのが、『賢い芸人が焼肉屋を始める理由』です。もちろん、芸人さんほどではないけれど、今日、サラリーマンだって、いろいろなリスクにさらされています。その最大のものが、あまりよい言葉ではないですが、「長生きリスク」ですね。つまり、人生を終えるずっと前に資産を食い潰してしまい、生活ができなくなるというリスクです。そのために必要なのが、長期的な資産形成です。この本は特に30代ぐらいの人を念頭において、どのようにしたら無理なく資産形成ができるかを書いたものです。



山口 | 「和風」というのは具体的には？

.....「和風資産運用入門」からについては次号(後編)に続く.....